



Title	上海・一九四四：武田泰淳の場合
Author(s)	高橋, 正
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1996, 30, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56518
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上海・一九四四

——武田泰淳の場合——

高

橋

正

はじめに

この小論のタイトルは前田愛「SHANGHAI 1925——都市小説としての『上海』」に因むものである。この論文は五・三〇事件を下敷とした横光利一『上海』を対象としたものであるが、筆者がここで扱うのは武田泰淳『上海の螢』である。しかし、文学研究者ではない筆者が以下に開陳するのは当然文学論ではない。人文地理学に関わって来た者が、自らとの触れ合いを通じて武田泰淳の作品から読み取った一九四四年前後の上海の一端を示すに過ぎない。『上海の螢』（昭和五一年二一九月「海」に連載、単行本としては同年十二月、中央公論社）に描かれた上海のイメージと筆者の上海での小さな体験に基づくイメージの重なりがこの小論執筆の出発点であることを告白しておこう。

文学作品と地図

文学作品とその読者との関わり方は読者の立場からしてつぎの三つの場合が考えられよう。

(一) 作者と同じ現実空間を共有している場合 (その空間との関わり方に作者と読者との間で違いのあることはいうまでもない)。

(二) 作品と同じ現実空間を体験している場合 (この場合は厳密な意味では「同じ」とはいえず、時の違いがあり現実空間は変容している)。

(三) 作品の描く空間が読者にとっては全くの仮想空間にすぎない場合 (読者は現実空間を全く経験することなく空間イメージを形成する)。

ここで示した現実空間、仮想空間という言葉は矢本貞幹氏からの借用である⁽¹⁾。氏は文学における空間について、自然主義小説の描こうとする現実的空間、ロマン主義の詩篇に見る想像の世界を主とする仮説(仮想)的空間、その両者の中間にある折衷的空间を示し、前二者の対立と調和により形成された最終者が最も大切で、すぐれた作品はロマン主義の傾向と写実主義の傾向を共に包含しているとする。

矢本氏のこの考えは筆者がかつて提示した地図の三角ダイヤグラムを想起させる⁽²⁾。即ち、筆者は地図という図的表現がすべてシンボル(S)・マップ(M)・ピクチャ(P)を頂点とする三角形の内にある存在であるとした(Mは測量地図)。これに準えれば文学作品はイデア(I)・リアリティー(R)・フィクション(F)を頂点とする三角形の内にすべて存在するということになる。

このような類似は偶然ではない。地図が図形による表現であるのに対し、文学作品は文字による表現であり、地図における作図者と読図者の関係はそのまま文学作品の作者と読者の関係に相当する。地図においてリアリティーとその図的表現との間に、また作図者と読図者のイメージの間にズレのあるのと同様に、文学作品においてもリアリティーと作者の考えるリアリティーの間に、また作者と読者のイメージの間にズレのあることは容易に理解できる。

このように考えると先に示した（一）の場合、読者が作者と同じ現実空間を共有したと読み取ったことは、両者がリアリティーに対し同じイメージを懷いたというにすぎないかも知れない。しかし、同じイメージを懷かせるに到つたリアリティーの存在を否定することはできない。

フェアリーランド

『上海の螢』が作者の二度目の中国行きにおける実体験に基づいて著されたことは周知の事実であるが、実体験と作品との関係について余り深く追求したものは管見では見られない。作者と筆者の関係は前掲の（一）に当り、その立場からこの作品を解説しよう。（一）に当ると考える理由は、この作品の舞台、特に上海のフランス租界にあつた中日文化協会（作品では東方文化協会）とそこに登場する多くの人々に対するイメージを作者と共有すると感じたからである。つまり場所と人々のイメージの共有である。

上海という街についてはさておき先ず東方文化協会についての作中のイメージの一端を示す。即ちこの作品の主人公（私）が上海到着後始めて協会を探し求めた結果、協会に辿り着いた場面である。

並木の柳が風になびいている。西も東もわからぬまま、私は清潔な歩道を歩いて行く。すると「東方文化協会」と墨文字で書かれた看板がふらさがっていた。

それは、異様に豪華な、お伽噺にでも出てきそうな建物だった。ついに発見できたという喜びよりも何よりも、これがばくの赴任する事務所なのかしら、本当にそうなのかな、という驚きで、私は半ば夢見心地だった。いつか必ず、一生に一度は、こんな不思議な建物に自分が巡り合うという、私の夢想が現実の形となって、私の眼の前にあった。

化粧煉瓦で積まれた建物の外郭が、ぜいたくを極めていたばかりでなく、内部の細部の造りが、凝りに凝っていた。磨きあげられた木製の階段を、私はのぼった。事務所は、二階か三階なのだ。（單行本一四一—五頁）。

この建物についてのイメージは前掲の（三）の立場にある読者には作者による仮想空間のように思えるかも知れない。しかし、当時（残念ながら日時に特定できないが）作者がここを始めて訪れたのと非常に近い時点にこの建物を訪ねた筆者のイメージもまた同様であった。この「私」のイメージが作者自身のイメージであることは、作者が当時交友関係にあった堀田喜衛との対談⁽³⁾でつぎのように述べていることからも明らかである。堀田自身当時上海の国際文化振興会に勤め友交関係のあつた作者を訪ねてこの建物を承知していることからこの発言は堀田氏に対してなされたものでないことは明らかである。

武田（前略）それが素晴らしい建物なんだよ。フェアリーランドというデンマークの船主の私宅ですよ。それを接収して使ってた。ヤフィー路とアルベル路の交差しているところだね。

堀田 建物がアンデルセンの童話に出てくるみたいな家だったな。部屋の壁も天井も寄木細工でね。（中略）庭は物凄く広いし、たいへんなもんだったよ。

この建物について作品のイメージと筆者のそれの一致するもう一つの箇所につぎの文章である。

階下のレストランからは庭の芝生に直接下りたつことができる。客たちは、広広とした芝生に面したレストランで食事を

することが、ことのほか好きだった。「上海の夜」など、支那趣味を満喫させる歌で有名な女歌手がやつてきた（後略）
(單行本六八頁)。

音曲はなかったが筆者自身このレストランの客となり食事を摂りながら庭の芝生を眺めた後芝生の上に下り立つ経験がある。作者は堀田とともに戦後ここを訪ねこの芝生の上に腰を下ろして往時を回想している。⁽⁴⁾

このような文例は他にもあるがいちいち引用することは避けたい。筆者がこの建物を訪れることができた理由は極めて簡単な事情からで、筆者の父が当時この協会に勤務しており、父に伴われて訪れた次第である。

場所については以上の通りであるが人についてのイメージの共有は残念ながらそう多くはない。この作品に登場する人物の多くはアルファベット一字か仮名または無名で記されている。しかし、その多くは実際の人物に特定でき、そのいくつかは当時筆者が耳にしたか実際逢う機会のあつた人々であることから、矢張り作者及び作品と筆者は程度や質の差はありながら共有するリアリティーに関わつたと考えられる。この作品の匿名性こそが、その描くイメージの背後にそのイメージに極めて近いリアリティーのあつたことを推測させる。

この匿名表現は、作品に登場する人々に特定できる人物に対する作者の思い遣りによるものであろう。それは各様々な事情があると思われるが、基本的には中日文化協会という当時の国策推進団体の性格によるものといえる。この協会の成立に今や悪名高い興亜院がかかわっていたことを示す証言として後に引用する内山完造『花甲録』の昭和甲申一九年の条がある。武田泰淳自身この協会にかかわった事実を恥辱としてその実態については多くは語っていない。このような態度は当時この協会に関係した人々に共通している。

高見順の証言

作中に記された出来事が実際にあったことを証明する数少ない資料のひとつとしてつぎに示す『高見順日記』の十一月八日とその翌日の条は興味深い。『上海の螢』では日付けを示すことはないが、この証言は日記だけに日付まで特定できる。

十一月八日

雨。

(中略)

ふたたび大陸新報社へ行き、池田君と中日文協へ行く。

武田、石上両君に、池田君から金を渡す。

(後略)

十一月九日

(前略)

ハミルトン・ハウスの中華電影へ。

「春江遺恨」の座談会。

小竹教授、小宮博士、陶晶孫、武田泰淳、石上玄一郎、高橋良三、鄭料、いづれも中日文協関係者、会社側から不破、辻久一。

これに対応する『上海の螢』の文章は次の通りで、ここでは九日の出来事が先に書かれている。

日本の映画会社が製作した「春江遺恨」の試写会があった。有名な男優、阪東妻三郎が高杉晋作役で出演している。

「駄目だ。それは難しい。不可能だ」と、私は観おわって思う。革命軍の考証など、よくやっている。監督は、もしかしたら左翼くずれかな、と私は秘かに判断する。

明るい外部に出ると、はたしてT氏は困ったように笑いだした。「これはどうもね。わからないよ。全然、わからないよ。中国人に観せたって」と、口に手をあてがって、いつまでもおかしがっている。

日本では「狼火は上海に揚る」という題名で封切されるという。東方文化協会で、この国策映画をめぐって座談会がひかれた。

席上のE君は、維新の志士など嫌いなので不機嫌である。発言を遠慮して、T氏は下うつむいている。O博士も無言である。私だけが会社側の人に御礼を言う。（後略）（単行本一三三一三四頁）

高見順氏が、協会事務所に顔を出した。「上海文学」の同人の一人をお供に連れて、機嫌よく入ってくる。「君とE君の南京行きの金が出来たよと言う。（後略）（同一三八頁）

「南京行き」とは当時当地で開催された第三回大東亜文学者大会出席のためであり、記述の順序が『日記』と逆になつている点後述する武田泰淳の文学の本質と合せ興味深い。

『高見順日記』の記述から作中のE氏が石上玄一郎、O博士が小竹文夫、T氏が陶晶孫の諸氏であることが知られる。このうち作品に最初に登場するのはE氏で、「私」が協会を訪れた最初の日小田理事長（元朝日新聞社、上海市政研究会事務局長林広吉氏）に「前略」あなたが東京であつたことのある小説家のE氏」として紹介されてい⁽⁶⁾る。

つぎにO博士については「京都の大学を出た（中略）支那経済史の専門家」と記され、「私」が博士の家に寄宿していることをE氏が羨ましがつてゐるとある。実際に武田泰淳は当時小竹博士邸に寄宿しており、その時の経験から『月光都市』という珠玉のような小品を著わし、小竹氏も戦後この寄宿者について一文を草している。⁽⁷⁾

第1表 『上海の螢』に登場する主要場所・人物

〔 〕筆者注

章	場 所	人物（主として初出のみ）
「上海の螢」	長崎、黃浦江、碼頭 北四川路、日本租界 ガーデンブリッジ、バンド アルベール路、霞飛路、法租界 東方文化協会 蘭心劇場、旧市街	同室の小男 知恩院の老僧 小田先生（理事長）、E君 Y君（経理）
「汗かく壁」	O博士宅（滬西） 南市郊外クリーク 張氏宅 フランス公園〔復興公園〕	O博士、T氏（中国側理事） G氏、上海語の教授（女学生） 林小姐（理事長秘書） 張氏（上海大学学長） O博士長男（聖ジョーンズ大学生） Q（日本人の批評家）
「まわる部屋」	（協会）階下のレストラン・庭 街なかの中国寺院（普通の支那家屋）	中国人の学者（乞食の研究） 日本人の歌手・作曲家・画家 日本語文芸雑誌の同人 中国婦人（重慶に夫）夏女士 林小姐の父（画家） Q（日本人の作家批評家）
「うら口」	帶中尉の秘密部屋 南京路の映画館・演劇場（紅樓夢） 蘭心劇場 北停車場（→南京）	王媽、周君、新しい女先生 帶中尉 高見順（座談会） N氏（白樺派長老） 田村俊子
「雑種」	南京からの帰りの汽車 協会の亡年会、本屋、古本屋 雪の朝の上海の街 事務所（「二十五史」を読む） 新年会（日本人の経営する印刷会社）	火野葦平、田村俊子 王媽とその夫
「廢園」	ゼスフィールド公園〔中山公園〕 外国人墓地〔静安公園〕 静安寺路 新しい住宅 (O)博士邸の庭の芝生 郊外の製靴工場の爆撃 哈同花園 酒場、白系ロシアのレストラン 中国式酒屋	阿部知二 理事長の旧友（新聞社の同僚） 神田にいた父と娘
	大陸新報社（バンド）	M氏（姓の違う近衛の実弟）

章	場 所	人物（主として初出のみ）
「歌」	<p>「白蛇伝」の絵看板・写真 映画館（密林怪人ターザン）</p> <p>「白蛇伝」観劇 ケイリ・アンド・ウォルシュ (繁華街の中央) [南京路]</p> <p>日本租界 (O博士夫人・子供の帰国 の荷作り用品を買いに)</p>	<p>田村俊子の死 林小姐の父の葬儀</p> <p>外務省の役人 (京大でのO博士の同級生)</p> <p>妻をつれた若い男 (必要のない日本人の突然の到来)</p>

T氏については「(協会において) 中国側を代表する文学者兼自然学者」と記されているが、陶氏が上海自然科学研究所に関わる医学者で郭沫若の義弟であることは周知の事実である。⁽⁸⁾

他にも作中の匿名者の何人かを特定できるが、いちいち言及する余裕はない。当時の協会について詳しい人にとってこの匿名は殆ど無意味といつてよい程にこの作品の内容はリアリティーと合致しており、単なる小説ではなく自伝的小説であることを示している。ただ筆者にとって気になる例外は作品の最初から登場するY氏で、理事長は「私」に「これが経理をやっているY君です」と紹介されているが特定できない。

当時この協会に勤めていた筆者の父らしき人物が全く登場してこない良三と名からT氏と区別するためY氏としたとも考えられるが記されたY氏の属性からは父とは別人としか考えられない。識者の教示を期待する。あるいは全くのフィクションによるものであろうか、それならばこの作品が自伝ではなく自伝的小説である証拠のひとつとなる。

道行き振りの文学

武田泰淳の『風媒花』を三島由紀夫はタペストリー（綴織）の文学である

と評し、同じく黒井千次は、これが通常の時間の経過にそつて展開される、即ち時間のリアリティーではなく空間のリアリティーを要求する文学であるとしているが⁽⁹⁾『上海の螢』についても同様である。黒井氏の『風媒花』論は『上海の螢』の解説にも有効で、「ほとんどの人物がある一対一の関係で登場してくるのではなく、意外なつながりを背後に秘めた人間として立現われ（中略）そして彼らをつなぎとめることの出来る唯一の共通項は「中国」なのである」とする。これは三島がこの作品のヒロインを「中国」であるとしたことを思わせる。

黒井氏によるとこれが三島のいう「緩織風」であり、人物もそこに「封じ込まれ」ており「時間の同時性が辛うじてかれらの人間関係を保障する」世界とはこの空間的リアリティーの運動の場に他ならないとする。堀田善衛も作者との対談でつぎのように言つてている。

武田さんの『風媒花』という小説でも、小説の一般的な概念と非常に違うところはストーリーがずっと通つて行つて発展するという形ではなくして、登場人物の数だけストーリーがあるというふうに言えるし、その登場人物 자체が必ずしも今までのストーリーという概念に添つた、あるいは乗つたものではなくて、一人ひとりが放射能をもつていて、連鎖反応を起す、というかな、そういうものが集められたような形でしょう。（『混々沌々』筑摩書房、昭和四五年、一九〇頁）

筆者は『上海の螢』についてもこれらと同じことがいえると考へるが、ここではヒロインは、「中国」よりも更に限定され「上海」というよりもむしろ「東方文化協会」実は「中日文化協会」というべきであろう。第一表がこのタペストリーを織り成すたて糸（場所）と人物を示している。

空間移動の文学

いまや作品に描かれた（その実作者の）上海イメージについて語るべき時がきた。

一般に上海から受ける最初のインパクトがバンドの光景であり、作者も同様であつたことは前掲の堀田氏との対談で述べている（一九四頁）通りである。しかし、この作品では上海が最初に登場して来る場面についてつぎのように記している。即ちこれがこの作品から読者の受ける上海のイメージである。

まず碼頭（埠頭）に停泊した船上から「私」の目に入ったのは「激しい陽の光に照らされて、白く乾ききつた波止場」と「何やら声高にわめきながら往来する苦力たちの姿」で上海での生活の不安と自由への期待が述べられているが省略する。ついで同室であった男にどこに行くのかと問われ知恩院の上海別院に行くと答え、「日本人租界」に住む妹を訪ねるこの男と同行することになる。「日本人租界」とは通称で凡そ旧アメリカ租界中の北四川路と吳淞路を中心とする日本人の多く住む地区をいい、別院はこの方面にあつた。⁽¹⁰⁾

彼と並んで歩いて行くと、支那家屋とも日本家屋ともつかない家が建ち並んでいた。（同九頁）

この記述は筆者が上海で始めて生活した北四川路公益坊の里弄式住居を思い出させる。

ついで彼と別れた「私」は別院に赴き、親切な白ひげの老僧に伴なわれて協会へ向う。

ガーデンブリッジを通過すると、河沿いにいかめしい建物が建ち並んでいた。西洋風の銀行、商社、官庁、新聞社、ホテルなど、胸をそらせ、肩を合わせて、整列したようにして、城壁のごとく河風をうけていた。それが、いわゆるバンドである。日本人臭い光景は消えて失くなる。そのかわり中国人臭い群衆が、いきなり現れる。タクシーなど、ほとんど走っていない。電車、バス、それから三輪車、^{ヤンチャ}客を乗せたのも、乗せないのも、前や後を横ぎつたり、追いぬいたり、いまにもぶつ

かりそうにすれちがつたりして、ひたすら進んでいる。喧噪は高まつたり低まつたりして、ときどき北京語とはちがつた妙な中国語が聞える。その声は、みんな怒鳴るような、投げやりな発音だ。人波を離れ、雜踏から遠ざかるにつれ、租界が近くなる。共同租界、イギリス租界、フランス租界、それらの租界のうち、どのあたりを走っているものやら、私にはわからない。

ヨーロッパ風の明るさ、ヨーロッパ風の色彩、ヨーロッパ風の街並みと人影が眼前に現れる。東京の銀座街とも、外人の多い横浜の街とも、それは異なつていて。そこには、しっかりと白人の勢力がくいこんでいる。中国に渡つたはずの私は、もう一つ別の、異国の街に入りこんでいるらしい。瀟洒な商店街に並木がつづいている。アルベル路、霞飛路、法租界その他、ヨーロッパ風の地名を上海語で発音する、漢字とローマ字が入りまじつた地帯のどこかに、私の行くべき事務所は隠れてしまつていて。どう探してもわかりそうにない。（同一一一十三頁）

老僧の、責任者の私宅を訪ねてはの注意で幸い所持していた理事長宅へタクシーを向ける。「何度も折れますが、道は次第に閑清な住宅区に導いて行く。」（同十三頁）ようやく理事長宅を見つけるが理事長は不在。いらだちを見せる老僧に「さつき、西洋菓子のような奇妙な建物の前を通り過ぎましたね。あの辺で降して下さい。どうもありがとうございました」（同十四頁）と老僧を返した後訪ねたこの奇妙な西洋館が目指す協会であった。

このようよな「私」の「道行き振り」は、旧アメリカ租界の碼頭地区から同じ旧アメリカ租界の一部である「日本人租界」（虹口^{ホンキョウ}）、さらに蘇州河を南へ渡つた通称「川向う」の旧イギリス租界の黃浦江沿いのバンドからフランス租界へと上海の街の光景の移り変りを美事に描いている。

このような「私」の空間移動はいうまでもなく時間的経過を伴つていて、「私」の目は時間的リアリティーよりもむしろ空間的リアリティーに向つていて。この場合は協会を目指すという目的をもつた空間移動であるが、作者の文学に一般に認められるのは目的のない「徘徊」（作者の言葉では「散歩」）ともいふべき空間的移動で、先述

の綴織風性格もこれによつてゐるといえる。この意味において武田泰淳の最初期の文学作品が『月光都市』であり、最後の作品が『目まいする散歩』であることは極めて象徴的である。

二つの上海

『月光都市』は作者が小竹氏邸に寄宿中の中秋節に上海の街を散歩した経験に基づいて著わされている。従つて作中の主人公「杉」は武田泰淳自身に他ならない。作中「夏から秋へかけ杉はよく附近へ自転車を走らせた。博士の屋敷がフランス租界のはづれなので鉄道線路の向ふや徐家匯クリークの西や龍華寺や萬国公墓など氣のむくままにひとりででかけた。(単行本十三頁)」とあるのが武田泰淳のことであることは明らかである。また作中安和寺路にあるとされた博士の家は実際アーマスト路にあつたことを小竹氏自身が記している。安和寺がアーマストの漢字表現であることはいうまでもない。

『月光都市』における散歩の場所を第一表に示した。その殆どがフランス租界内である点興味深い。これと極めて対称的なのは同じ上海もので同じく杉を主人公とする『蝮のすえ』である。この作品中に記された地名も第一表に示したがその殆どが共同租界中の旧アメリカ租界の虹口地区にある。このことはこの作品が作者の敗戦後の日僑集中区での生活に基づいて著わされたことから当然といえよう。

『月光都市』と『蝮のすえ』のイメージにおけるこの空間的断絶が、敗戦という時間的断絶と関係していることはいうまでもない。後者においても杉はしばしば非常線を突破し、時には日僑集中区外である「河向う」へ散歩に行つてゐる。その理由として「終戦までは、美しい仏租界の中に住んでいたため、よごれっぽい虹口の街が嫌いな

第2表 武田泰淳の二つの上海

〔 〕現地名・記述順に示す

『月光都市』	『蝮のすえ』
安和寺路〔法華路〕〔新華路〕	会元里〔乍浦路313弄〕
旧同文書院前	北四川路
除氏墓田、徐家匯	虹口市場
大世界	海寧路はずれの日本人の住む里の入口
八仙橋〔雲南南路〕	楊樹浦
善鎌路〔常熟路〕	虹口乍甫路
杜美路〔長樂路〕	崑山路
福開森路電停〔武康路〕	海寧路
泰山路〔淮海中路〕	ガーデンブリッジ
華山路〔重慶南路？〕	集中地区外バンド、黃浦江
普陀禪寺入口	楊樹浦行き電車道路に近い場所
蘆山路〔淮海西路〕	揚子江の入口
交通大学裏門	鹿児島
右→中山路〔中山西路〕	
左→徐家匯	

のであった』で記しているが、これもまた作者自身の実感であったと思われる。虹口が旧英租界やフランス租界に比べ見劣りすることは筆者の実感でもあり、その違いに列強の植民都市形成の違いを見て取ることもできるが、これについては別稿としている。また作者の文学観・人生観に上海において敗戦を経験したことが大きく影響していることも、作者自身しばしば言及しているし、多くの人々が論じているのでここでは深くは言及しない。ただ「風媒花」の主人公峰（実は作者自身）が上海で知った一番重要なこととしてこの世には権力というものがあり、人間には三種あって第一は現状における権力者、第二は権力の廻りをウロウロしている連中、第三は第一に対する反抗者だがこれも別の権力者とし峰自身第二に属するとしていることは注目される。作者は敗戦によって権力者支配者の側から転落した訳であるが、このことが上述の二作品における空間イメージの断絶を強く支配している。

この協会のいわば戦犯的性格がそのリアリティーを追求する大きな障害となつてゐることは明らかである。筆者も若干の探索を試みたが十分の成果を得ていない。しかし、本論の目的からいって全く触れない訳にはいかないため、これについて二・三の証言を紹介しよう。

① 内山完造『花甲録』（一九六〇年、岩波書店）「一度興亞院文化部から中日文化協会を造るとかで、その民間発起人の中に加えられたことがあつたが、とうとう失礼してしまつたことがあつた。（後略）（二九八頁、昭和甲申一九年）同氏『上海生活三十年』にも同様な記述がある。協会の成立に興亞院が関係していることを示す証言である。

上海・一九四四

② 「支那」三三卷五号によると、昭和一七年四月一日漢口中山公園において中日文化協会第一次全国大会が開催され、南京総会理事長として外交部長、理事として考試院長・中央大學校長など國府の要人、上海・浙江・蘇州・武漢から分会代表、華北からオブザーバーが出席している。また同誌三四卷五号によると昭和一八年四月一日から三日間「國府還都三周年記念の掉尾を飾り参戦中国文化各界の戦争意識を昂揚する中日文化協会第二次全国代表者大会」が南京中日協会和平堂で開催され、日本から塙谷温・谷川徹三・河上徹太郎氏が出席、閉会式後重光駐華大使の招宴、武者小路實篤氏の講演があつたが、協会の名譽理事として汪精衛の名も見える。しかしこの中日文化協会と「東方文化協会」との関係を示す確たる証固は管見ではなく、筆者にとつてのミッシングリンクである。

③ 正木知海「邦人美術小史」（上海市政研究会編『上海の文化』華中鐵道總裁室弘報室秋田正男発行、昭和一

九年三月所収)「(前略)又、中日文化協会上海分会でも邦人画家が結束して日中文化の交流に資するため上海及び南京で美術展を開催した。これも全上海の邦人画家を包含されたものではなかつたが相当質の揃つたものであつた。これは解組前のことで当時これ等の運営に当つた人は旧興亞院の松村雄蔵氏(以下四氏名略)の諸氏である。十八年秋に入つて中日文化協会上海分会が根本的に解組され日中文化向上に実質的な運営が執られることとなつた。」

(一四二二頁)

筆者はこの展覧会の出展目録と思われるパンフレットをある古書店で手にしたことがあつたが残念ながら購入していらない。また十八年の分会の解組は協会自体の解組と関係あるものと推測される。というのも上海市政研究会(昭和十六年六月一日設立)も同じ昭和十八年の八月十四日に解散しており、そのメンバーの一部が協会へ移つてゐる。特に協会の理事長となつた林広吉氏は研究会の事務局長であつたし筆者の父も研究会のメンバーの一人であつたことが注目される。⁽¹²⁾

最後に協会の活動についての小さな証言を示しておこう。即ち後藤末雄氏が中日文化協会の講堂で中国人中学教員を対象に中国の近代文化について講演したことを記している(『芸術の支那・科学の支那』第一書房 昭和十七年十月)。しかしこれは解組以前の協会であることはいうまでもない。再編後の協会の活動についてもこのような断片的な証言を集める以外方法はないのであろうか。

むすび

筆者は、学術誌には私的な経験を記さないという学界のタブーを敢えて犯し、また大阪万博の年の春急逝した父

親の過去を世間に曝す不孝者であるかも知れない。筆者自身当時権力に繋なる者であったという意識から上海について公に記すことを回避してきたが、一九八九年十二月から翌年正月にかけて行なわれた上海の復旦大学との共同調査（代表濱島敦俊教授）に参加する機会を与えられ当地を再訪したことから壇を切つたように上海についての資料収集を始めた。従つて現時点では十分な探究をおこなつたとはいえないが、以来毎年授業で上海を扱つてきたこと也有つて停年を機に思い切つてこの小論を著わした。

この小論の内容の一部は日本学懇話会（大阪大学文学部）と史学研究会（京都大学）において発表した。その際御教示賜わつた方、また文献探索にお世話になつた方々（特に愛知大学文学部の藤田佳久教授、同大学霞山文庫）に感謝の意を表す。

なお、武田泰淳研究者の多くの所論について触れなかつた点も本稿の性格によるためであり御海容願いたい。

附記 摘筆後入手した『現代上海大事記』（上海辞書出版社 一九九六）の一九四四年五月初の条に「中日文協事務局長周化人辞職、陶晶孫繼任」、同年六月一日の条に「中日文化界人士組織的東方文化編訳館成立」等本稿に關係する記事が見出される。

注

- (1) 「文学における空間——イギリスのユートピア文学」（佐藤泰正編『文学における空間』笠間書院、一九八二）
- (2) 「カルトロジーの方法論に関する覚書」（水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圈』大朋堂、一九八六）
- (3) 『わが文学、わが昭和史』筑摩書房、一九七三、一一七頁（『展望』昭和四六年一月号—翌四月号所載の対談）
- (4) 『冒險と計算』講談社、一九六六、二三三頁（一九六一年十二月二十五日毎日新聞所載「菊の花、河、大地、中国の旅」この建物については上海市民用建築設計院『上海近代建築史稿』上海三聯書店、一九八八（外観、内部写真あり）

- (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)
- り)。ヤーフィー(霞飛)路は現在淮海(中)路、アルベール(亜爾培)路は陝西(南)路で、協会はフォツシユ路との交差点より少し南へ行った西側にあり、共産主義青年団の建物となつてゐる。
- (5) この大会については尾崎秀樹『近代文学の傷痕——大東亜文学者大会・その他——』普通社 一九六三)。この大会を機に来滬した人達が多く協会を訪れる父はその応接に忙しかつた。
- (6) 石上玄一郎『彷徨えるユダヤ人』人文書院 一九七四 二三一—四頁。林氏については武田泰淳「東方書局のこと」『本の手帖』一九六一・六月号)に詳しく、酒井三郎『昭和研究会 ある知識人集団の軌跡』(TBSブリタニカ一九七九)にも見える。
- (7) 「上海にいた作家たち」『群像』一九五六年六号
- (8) 陶氏には遺稿集『日本への遺書』(創元社 一九五二)があるが協会との関係を示す文章は当然ながらない。
- (9) 三島由紀夫「解説」(『風媒花』新潮文庫 一九五四 所載)。黒井千次「薬罐と空間——「風媒花」の方法——『文芸展望』九 一九七五年。
- (10) この寺院について作者自身父の友人(作品での老僧)が「日本租界のいちばん終わりの北四川路底」というところで開いていたと述べている(前掲注3)。知恩院は北四川路の北端、興亞院(旧パブリックスクール)の向いの寶慶安路(Darroch Road 現在の多化路)との角にあつた。
- (11) 武田泰淳は「ぼくも實際上海でもつて、こんどの敗戦を迎へなければ、おそらく小説を書こうとしても、書く意味をくつつけることができなかつたと思う。日本の小説に対しても、『混々沌々』(一九四四)と述べている。その他竹内実「武田泰淳の中国体験」(『国文学』五五卷六号)、名越覚「武田泰淳——転向体験と戦争体験」(西田勝編『戦争と文学者』(三一書房 一九八三)等参照。
- (12) 上海居留民団『上海居留民団三十五年記念誌』一九四一年 一二五五一—五九頁。